

## 博士論文要約

架け橋期における文字の読みの研究  
—ひらがな読みに関わる認知能力を中心に—

大阪総合保育大学大学院  
児童保育研究科 児童保育専攻  
宮本 直美

## 1. 全体要旨

本論文では、読みにおける幼児期の教育と小学校教育との滑らかな接続を目指し、幼児期から児童期にかけての文字の読みの発達について概観し、読みの発達に関わる認知能力について、年長児と小学校1年生を対象にして読みの様相についての実態を把握する調査を行った。調査結果に基づき、年長児クラスでの読みのレディネスを育む実践や児童期に読みの困難が予測される年長児に対する読みのレディネスを高める取り組みを行った。調査結果と実践を踏まえ、諸外国における幼児の文字習得へのアプローチ方法を参考としながら、就学時期における読みのレディネスについて検討した。

## 2. 研究目的

本論文では、ひらがな読みに関わる幼児期の様相についての実態を把握し、年長児を対象として、日本語話者の読みの基礎であるひらがな一文字の読みに関わる認知能力を明らかにしたうえで、就学時期における読みのレディネスについて検討することを目的とする。

## 3. 本論文の章構成

序章 問題の所在と課題の設定

本論執筆に至った経緯

第1節 幼児期からつなぐ児童期の読み

第2節 日本の架け橋期にある子どもの読み

第3節 海外の幼児期の教育における読み

第4節 海外における幼児期の読みの基礎

第5節 日本における幼児期の読みの研究の動向

第6節 本研究の目的

第7節 本論文の構成

第1章 架け橋期における読みの発達

第1節 読みの発達について

第2節 読みのメカニズムと読みに関わる能力

第3節 読みに困難のある幼児児童の事例から見た読みに関わる認知能力

第2章 架け橋期の読みと読みに関わる認知能力

第1節 幼児の読みに関わる認知能力を測定する課題

第2節	年長児の6月における文字の読みと読みに関わる認知能力
第3節	年長児の3月における文字の読みと読みに関わる認知能力
第4節	年長児の6月から3月における文字の習得の変化に関わる事項
第5節	年長児の読みに関わる認知能力と小学校入学後の読みの習得度との関連
第6節	年長児から小学校1年生にかけての読みに関わる認知能力の発達
第3章	読みと文字に対する興味関心および読みに関わる認知能力との関連
第1節	文字に対する興味関心と読みに関わる認知能力
第2節	文字に対する興味関心と読みに関わる認知能力および読みの習得との関連
第4章	読みに対する幼稚園教員の認識
第1節	読みの困難な幼児に対する支援者の認識
第2節	幼稚園教員の読み困難に対する予測
第3節	読みの困難が予測される年長児に対する小学校への滑らかな接続を目指して
第5章	就学前の読みのレディネスを育む実践
第1節	就学前の読みのレディネスとしての視点
第2節	年長児クラスにおける音韻意識を中心とした文字に関わる感覚を育む実践
第3節	少人数グループにおける個に応じた読みのレディネスを育む実践
終章	本研究の総括および今後の課題
第1節	本研究で得られた知見の総括
第2節	今後の課題と展望

## 4. 各章要約

### 序章 問題の所在と課題の設定

序章では、本論文の問題の所在と課題の設定について記述した。

現状、本邦の文字の習得における幼児期の教育と小学校教育の連続性は十分とはいえないが、これは学びの芽生えから自覚的な学びへと移行する時期の子どもたちの命題といえ、他国においても普遍的な課題である。文字の教育について、ほとんどのEU加盟国の幼稚園カリキュラムは、音韻的および音素的認識の重要性を考慮し、その発達をサポートする目標を提案している。幼児期の様々な前駆的スキルは、読み書きの発達にとって重要である。

日本における幼児期の読みの研究の動向としては、幼児の身近にある絵本や、日常生活にあるお手紙などの活動は研究対象となりやすく、幼児の文字に対する興味や関心についての

論文も散見される。幼児の読みに関わる認知能力の研究としては、音韻意識が重要視されるが、他に、視覚認知やワーキングメモリーなども示唆されている。幼児期の読みに関わる知見は十分とはいえないことから、幼児期から児童における、いわゆる架け橋期における、読みの発達の間や幼保小をつなぐカリキュラムの間から、滑らかな接続を図ることが喫緊の課題といえる。

## 第1章 架け橋期における読みの発達

第1章では、二重経路モデル（Dual Route Cascaded モデル）に基づいた読みに関わる認知能力について、音韻処理、ワーキングメモリー、視覚認知、語彙、自動化（呼称速度）、眼球運動の6つとして整理した。また、読みに困難のある幼児児童の先行研究事例から示される読みに関わる認知能力についても考察した。日本語話者の年長児から小学校低学年における架け橋期の読みに関わる認知能力には、音韻処理、ワーキングメモリー（Working Memory）、視覚認知、語彙、自動化が関わることが推定された。

## 第2章 架け橋期の読みと読みに関わる認知能力

第2章では、推定された読みに関わる認知能力を測定する課題を作成し、年長6月と3月、小学校1年生7月に調査を行った。年長児のひらがな読みは個人差が大きいものの、年長6月の時期は、多くの年長児はほぼ清音を読み、濁音半濁音の読みを学んでいると考えられる。読みに関わる認知能力としては自動化、聴覚的記憶を伴う音韻意識、図形の同異を弁別する視覚認知が関わることが示唆された。年長3月の時期は、ひらがな清濁音をほぼ習得し習熟していくとともに、特殊音節を習得していく。読みに関わる認知能力としては、自動化と音韻意識は関連しながら関与すると考えられた。

小学校1年生7月の時期は、濁音半濁音と特殊音節の習得と習熟が進む。読み流暢群と読み困難群の2群を比較すると、特殊音節の習得に差が認められた。2群において、全体的にみれば、読みに関わる認知能力は年長3月の時期は自動化と聴覚的な短期記憶を必要とする音韻意識に、小学校1年生7月の時期は音韻を分解抽出する音韻意識に差が見られる。しかし、一人ひとり読みに関わる認知能力の強弱は異なり、読みの様相も一人ひとり異なることから、一人ひとりの読みの状態に応じたきめ細やかな支援を早期から行うことが重要である。

### 第3章 読みと文字に対する興味関心および読みに関わる認知能力との関連

第3章では、幼児の保護者を対象にして、幼児期における読みに関する興味関心や読みに関わる認知能力等についての質問紙調査を実施し、幼児の文字に対する興味関心の程度、読みに関わる認知能力、ひらがな文字の習得との関連について示した。文字に対する興味関心とひらがな文字の習得には相関があることから、文字に対する興味関心はひらがな文字の習得に緩やかに関連すると考えられた。一方、文字に対する興味関心と読みに関わる認知能力については、本研究においては関連が見られなかった。文字に対する興味関心と読みに関わる認知能力とは異なるベクトルとしてひらがな文字の習得に作用している可能性があると考えられる。

### 第4章 読みに対する幼稚園教員の認識

第4章では、幼稚園教員が捉える、幼児の読み困難に対する認識について示した。幼稚園教員は読みの困難を、「『文字』についての関心がない」、「発語がない・言葉の理解が年齢不相応」、「ひらがな文字を読むことが出来ない」「集中力がない」「外国にルーツのある幼児」の5つの観点から予測しており、読みに関わる認知能力の観点については確認できなかった。読みに何らかの困難が予測される幼児の就学に際しては、保育者と小学校教員とが読みに関わる認知能力の観点をも含めた共通の観点から幼児の読みの実態を把握するなどし、何らかの困難が予測される幼児については、継続した個別最適な支援を幼児教育施設から引継ぐことが重要であり、それは文字に対する学びにおける幼保小の円滑な接続につながると考えられる。

### 第5章 就学前の読みのレディネスを育む実践

第5章では、第1章から第4章で示した事柄を基に、年長児クラスにおいて読みのレディネスを育む実践を行い、就学時期の読みのレディネスについて検討した。また、就学後に読みに困難が予測される幼児に対して、読みのレディネスを育む実践を行った。

幼児期は遊びを通して学ぶ時期であり、文字の習得を前提とはせず、主体的で協働的な学びの中で、文字に対する学びが深まっていく。幼児期の教育においては、幼児の興味関心の高い事物を取り入れ、多様な発達段階に応じた用具を工夫し、一人ひとりが遊びに没頭できる環境を整備するとともに、個別に必要な支援を行うことも大切である。主体的で協働的な学びという意味において、小学校教育が幼児期の教育に学ぶところは大きいと考える。

## 終章 本研究の総括および今後の課題

本研究の結果から、就学時期の読みのレディネスとして、年長の時期に自分の名前を一文一文字読むことができるのか、音韻を分解抽出できるのか、単語の逆唱ができるのか等の音韻を操作する力が指標となると考えられることから、これらについては園での生活や遊びを通して継続的に見守ることを提案した。見守る中で、何らかの支援が必要と判断された場合は、個に応じた必要な支援を行い、小学校へ引き継ぐことは、小学校生活における子どものウェルビーイング（well-being）にとって重要である。

幼児教育施設において音韻意識を含む文字の感覚を十分に育むことは、小学校教育における文字指導への滑らかな接続を可能とする。この文字に対する感覚を具体的に示し、幼保小において一貫して育む力としてカリキュラムの中に明確に位置づけることにより、架け橋期の文字の学びにおける滑らかな接続を為すことができると考える。

## 5. 主な引用文献

- 秋田喜代美・無藤 隆・藤岡真貴子・安見克夫. (1995) 幼児はいかに本を読むか?: かな文字の習得と読み方の関連性の縦断的検討. *発達心理学研究*, **6** (1), 58-68.
- 天野 清. (1972). 全国水準調査: 読み書き能力の全国水準 [1]: 読む能力. 国立国語研究所, *国立国語研究所報告 45 幼児の読み書き能力* (pp.15-95). 東京: 東京書籍.
- 後藤多可志・宇野 彰・春原則子・金子真人・栗屋徳子・狐塚順子・片野晶子. (2010). 発達性読み書き障害児における視機能, 視知覚および視覚認知機能について. *音声言語医学*, **51** (1), 38-53.
- 原 恵子. (2012). 幼児期・学童期の音韻意識の発達 (<小特集>子どもの音声). *日本音響学会誌*, **68** (5), 260-265.
- 猪俣朋恵・宇野 彰・春原則子. (2013). 年長児におけるひらがなの読み書きに影響する認知要因の検討. *音声言語医学*, **54** (2), 122-128.
- 垣花真一郎・安藤寿康・小山麻紀・飯高晶子・菅原いづみ. (2009). 幼児のかな識字能力の認知的規定因. *教育心理学研究*, **57** (3), 295-308.
- 川崎聡大. (2017a). ディスレクシア. 日本児童研究所 (監修). 高橋恵子・山祐嗣 (編). *児童心理学の進歩 2017 年版 56 巻* (pp.158-177). 東京: 金子書房.
- 無藤 隆・遠藤めぐみ・坂田理恵・武重仁子. (1992). 幼稚園児のかな文字の読みと自分の名前の読みとの関連. *発達心理学研究*, **3** (1), 33-42.

- 柴崎正行. (1987). 幼児は平仮名をいかにして覚えるか. 森上史朗 (編), *保育の科学 別冊発達 6* (pp.187-199). 京都: ミネルヴァ書房.
- 高橋 登. (1997). 幼児のことば遊びの発達 : "しりとり"を可能にする条件の分析. *発達心理学研究*, **8** (1) , 42-52.
- 東俣淳子. (2018). 5 歳児における読みの発達に関する保育士向けチェックリスト作成の試み. *LD 研究*, **27** (2) , 192-199.
- 宇野 彰・春原則子・金子真人・栗屋徳子. (2007). 発達性 dyslexia の認知障害構造: 音韻障害単独説で日本語話者の発達性 dyslexia を説明可能なのか?. *音声言語医学*, **48** (2) , 105-111.